

### 日本最古の貨幣

2007年3月、山城町・木津町・加茂町の合併により木津川市が誕生しました。奈良県境に近いですが、日本最古の貨幣・<sup>わどうかいちん</sup>和同開珎の<sup>じゅせんし</sup>鑄銭司（鑄造所のこと）跡が旧加茂町の<sup>ぜず</sup>銭司にあり、それを示す石碑「鑄銭之遺跡」が建っています。付近には銅鉦山が存在し、鑄型に必要な粘土も採れて、木津川の水運にも恵まれていました。出土物（和同開珎を含む皇朝十二銭4種、鑄型、木炭片、ふいごの口など）や地層などの分析により、当時のものと推定されたのです。

※皇朝十二銭……奈良朝から平安朝前期にかけて律令国家が公的に発行した貨幣（銅銭）。  
全部で12種類。和同開珎はその最初。（最後は乾元大宝で958年鑄造）

和同開珎のことを示したとされるのが『<sup>しよくにほんぎ</sup>続日本紀』の慶雲五年（708）の下記の記述です。平城京遷都の2年前のことですが、元明天皇の治世で、政界の実力者は藤原不比等でした。

※『続日本紀』……『日本書紀』に次ぐ2番目の国史で、平安京遷都（794）後の797年に撰上。

〔日本書紀〕 顕宗二年（486）	「……、稲は斛に銀錢一文、……」（銀錢記事の初出）
〔扶桑略記〕 天智七年（668）	「崇福寺の創建」 ※近年の調査で無文銭が発見された
〔日本書紀〕 天武三年（674）	「対馬国が産銀を献上した」
〔日本書紀〕 天武一二年（683）	「四月一五日、銅銭の使用を命じ銀銭の使用を禁止した」 「四月一八日、銀銭の使用を許した」
〔日本書紀〕 持統八年（694）	「鑄銭司を任命した」
〔続日本紀〕 文武二年（698）	「因幡国から銅鉦を献上」
〔続日本紀〕 慶雲五年（708）	「正月一日、武蔵国秩父郡が和銅を献上したので、 これを祝い、慶雲五年を和銅元年と改元した」
現在の埼玉県秩父市黒谷の和銅山に和銅採掘跡があり、県指定の旧跡とされる。和銅とは純度が高く精錬も不要なほどの自然銅のこと。	「二月一日、初めて催鑄銭司を置いた」 「五月一日、初めて銀銭を発行した」 「七月二六日、近江国に銅銭を鑄造させた」 「八月一〇日、初めて銅銭を発行した」
〔続日本紀〕 和銅二年（709）	「一月二五日、銀銭の私鑄を禁じ、罰則を定めた」 「八月二日、銀銭を廃止した」
〔続日本紀〕 和銅三年（710）	「三月一〇日、平城京遷都」
〔続日本紀〕 和銅四年（711）	「一〇月二三日、禄法、蓄銭叙位令、私鑄禁止令を発した」

この記述では和銅元年の発行銭が和同開珎とは断定できませんね。それ以前にも種々の銭貨があったようで、最古の貨幣とも呼べない。実は、和同開珎の名称はどの文献史料にも登場しないという大きな課題があるのですが、定説では次のように説明しています。

和同開珎以前にも銭貨のようなものが存在する。しかし、それらは銀の地金であるとか、名称の刻印（銭文と呼ぶ）が無い無文銭であり、通貨としてよりも信仰的な<sup>まじな</sup>呪い銭として使われた。従って、真に流通貨幣として用いられたのは、和同開珎が最初と考えられる。

定説では「和同開珎の名称は和銅の年号を反映」とし、また「初めて」という表現を重視しています。当然ながら異説も多いのですが、覆すだけの証拠も見つからなかったわけです。

和同開珎への移行シナリオ

**富本銭** ふほんせんというのは奈良県飛鳥池遺跡から出土した銅銭で、県文化財研究所が和同開珎よりも古いものと発表（1999年1月19日）したので、大反響を呼びました。定説を唱えた側では、「あくまでも富本銭は呪い銭」と論を張りましたが、和同開珎最古説は崩れつつあります。

定説に従うと、先述したように天武一二年の銅銭と銀銭が理解できません。流通したからこそ銀銭が禁止対象にもなるのであって、ここでの銅銭を富本銭と考えると、視界が開けてきます。大筋は**銀地金・銀銭→富本銭（銅銭）→和同開珎（新銅銭）**という**銀銭から銅銭への移行**です。富本銭は和同開珎へのつなぎ（地均し）役と見なすわけです。このシナリオでは**和同開珎発行は天武天皇以来の継承事業**と考えますので、**和同開珎の名を特別に記す必要も無かった**わけです。また、「初めて」という表現は、元明天皇の治世では最初であるという意味だと理解するのです。尚、天武一二年でも銀銭禁止を3日後に早くも撤回したように、抵抗は強かったと思われます。逆に言えば、それくらい流通していた証拠です。しかし、それでも移行を図ったわけです。

では、なぜ移行を図ったのかと言えば、**平城京遷都に要する莫大な費用を捻出するため**です。つまり、銀よりも安い銅を用いて通貨を発行し、一方では価値の高い銀を回収し、10~50倍？と見られる大きな差益を蓄積しようと朝廷は目論んだわけです。

一方、和同開珎の遺跡発掘調査や科学的成分分析が進み、ここで大きな進展がありました。

- ①和同開珎は8世紀初め頃に造られた可能性が高い。（質量分析法）
- ②和同開珎の出土枚数は圧倒的で、流通した貨幣と呼べる唯一のもの。（下表参照）
- ③和同開珎や皇朝十二銭は山口県の ながのぼり **長登銅山**産の銅と断定できる。（鉛同位体分析法）  
また、同鉱山付近には鑄銭司が置かれ、和銅年間の頃から莫大な産出量があった。  
尚、東大寺大仏の材料の銅もヒ素分が多いという特徴から、長登銅山のものと判明。

この結果、和銅改元時の新銅銭は和同開珎である可能性がほぼ確実になったと言えましょう。驚きは③ですね、和同開珎の素材は秩父産の和銅ではないわけですから。それゆえ、秩父地方の記録を調べると、和銅年間以降に貨幣鑄造を賄うだけの銅の産出は認められないそうです。

古代銭の出土状況（『銭の考古学』鈴木公雄／吉川弘文館より）

旧国名	富本銭	和同開珎銅銭	同銀銭	乾元大宝
大和・山城・河内・摂津・和泉	74	2,992	26	398
近江・筑前・伊勢・加賀	0	1,328	9	137
その他	2	528	7	79
合計	76	4,848	44	614
※唐の長安城、渤海	0	1	5	0

かつて**都が置かれた畿内に集中している**。近江〔近江朝〕、筑前〔太宰府〕、伊勢〔伊勢神宮〕、加賀国〔気多神宮〕も朝廷ゆかりの地域。中国出土分は儀礼的な贈り物か？

## 「カイチン」？ それとも「カイホウ」？

下表が示すように、「珎」は「②寶」の一部を抜き出した形の漢字ですが、「②寶」とは別物と考えられます。「②寶」は文献史料の中では「宝」の意味以外に用いられることは無く、一方、「珎」はそれ一字で「珍宝」「珍財」「珍貨」、及び「貨幣」そのものの意味で用いられています。結論として、「珎」は「珍」の異体字であり、「チン」と読むのが妥当と考えられます。

本字	異体字	略字	読み
①寶 (ウ+王+缶+貝)	②寶 (ウ+王+尔+貝)	宝	ホウ
珍	珎 (王+尔)		チン

## 年号は「和銅」、通貨名称は「和同」

「和同」は「和銅」という年号を反映したもの、即ち、「同」は「銅」を簡略にしたものという見方もあります。しかし、和同開珎の手本とされる中国の開元通<sup>つうほう</sup>寶は武徳四年(621)の铸造で年号とは無関係です。また、日本の皇朝十二銭も年号を採用したのは4種だけです。文献史料を見ても年号に「和同」を使ったものは一つもありません。結局、「和同」とは中国古典に登場する吉祥語(天地和同・上下和同・万物和同)に由来するもので、「和銅」とは無関係とされます。

## 和同開珎発行の舞台裏

発行前年の二月、文武天皇が平城京遷都の詮議を諮っています。六月に文武天皇が亡くなり、生母の元明天皇が翌月に即位しますが、この時点で翌年の改元自体は予定されてははずです。当時、疫病の流行と凶作で世情は不安でした。改元年号に「和同」という吉祥語を採用するのは妥当です。また同時に、遷都発表と新銭(和同開珎)の準備を進めたかも知れない。ところが、和銅の献上という慶事がある、年号だけが「和銅」に変更された……。和同開珎=秩父和銅と固執しなければ、長等銅山の件も『続日本紀』の記述も筋が通り、無理がありません。

ここで、遷都に向けた蓄財計画(移行シナリオ)に関して、別の大きな理由が考えられます。それは、文武天皇が遣唐使派遣を再開(669年以降途絶え大宝二年・702に派遣)したことで、唐との交易にも相当な銀貨が必要になったと推測されます。遷都や事業継承以上に重大です。

さて、銅銭への移行計画は、実情では遅滞し、銀銭の禁止や許可を何度も繰り返しています。地金に鑄潰しても価値の低い銅銭は敬遠され、一部の豪族が非公式な通貨(私鑄銭)を発行するという有り様でした。そのため、朝廷は中央と地方の役所や関係の深い寺社などに圧力をかけ、俸禄を米や布ではなく銭で払う〔禄法〕とし、租・庸の税も銭で貢納するように命じています。また、蓄銭叙位令を発してまで銀銭を回収し、銅銭への移行を図ろうとしたのです。

※蓄銭叙位令……銀銭を蓄財した者がそれを朝廷に差し出せば、その額に応じて位階を授け、昇進させるというもの。効果は疑問視されており、800年に廃止。

和同開珎を始めとする皇朝十二銭を支えたのは、長等銅山を筆頭とする銅鉦山の開発でした。そして、鉦山開発や貨幣鑄造を技術面で支えたのは、渡来人(新羅人や高麗人)の存在でした。加茂町銭司の辺りも早くから渡来人が集住しており、蟹満寺〔新羅系〕や高麗寺跡〔高麗系〕はそれを物語ってくれます。後の聖武天皇が恭仁京を置いたのも同じ地域です。和同開珎の問題はもはや最古説から脱却し、中国や朝鮮半島を含めた交流関係の中で見るべきでしょう。

## 【付録 1】羊太夫伝説

羊太夫は和銅採掘に貢献したことで朝廷から褒賞を賜りますが、後には謀反の疑いで朝廷軍に討伐されたという謎の人物です。一説には、今の群馬県多野郡に住む小幡太郎太夫勝定の子で、名前は宗勝とも言われています。彼には七人の娘がいて、金の輿に乗り逃げようとしたものの、捕えられ命を落としたそうです。姫君と金の輿が葬られた場所が、群馬県藤岡市にある七輿山と伝わりますが、そこに古墳があり、朝廷と関係の深い人物が被葬者として考えられています。

「多胡碑」は群馬県多野郡吉井町池<sup>いけ</sup>字御門<sup>みかど</sup>にある国の特別史跡で、日本三古碑の一つです。碑文の大意は、「朝廷では上野国の3郡のうちから300戸をさいて1郡をつくり、羊に給して多胡郡と命名した。和銅4年3月9日の命令である。左中弁は多治比真人三宅麻呂、太政官は穂積親王、左大臣は石上麻呂、右大臣は藤原不比等である」というものです。碑文に登場する多治比真人三宅麻呂は、和銅元年に初めて催鑄銭司を置いた時に任命された人物です。

問題は、この「羊」が何を指すのかということですが、人名であろうとの解釈が大勢を占め、羊太夫と同一視される場合もあります。おそらく鉱山開発・採掘・鑄造の技術を持った渡来人と思われるが、謎のままです。興味ある方は、『塔』（梅原猛：著）をお読みください。

## 【付録 2】渡来人移住に関する記述

## ●『日本書紀』靈龜二年（716）〔元正天皇〕

駿河・甲斐・相模・上総・下総・常陸・下野の七カ国に住んでいた高麗人1,799人を武蔵国に集め、高麗郡を置いた。……現在の日高市・飯<sup>はんのう</sup>能<sup>のう</sup>市に当たる地域です。

## ●天平宝宇二年（755）〔淳仁天皇〕

新羅人300人が北足立郡南部に移され、新羅郡（後の新<sup>にい</sup>座<sup>くら</sup>郡）が設置された。

移住させた理由は、おそらく鉱山開発・採掘・鑄造のためでしょう。因みに、高麗郡は和銅を献上した秩父郡の東に隣接する地域で、一方の新羅郡はかなり離れています。

## 【付録 3】偽情報で年号決定

文武天皇の治世（701年）に対馬国から金が献上されました。我が国では初の金の産出です。朝廷も大いに慶び、年号を「大宝」と決めました。ところが後になって、三<sup>みたの</sup>田<sup>いつせ</sup>五瀬（朝廷から現地に派遣された役人）が大納言大伴御行<sup>みゆき</sup>を欺いた偽装と判明したのです。こんな事件があったわけですから、秩父の和銅が献上された時、朝廷は相当慎重に確かめたことでしょうね。

## 【付録 4】藤原純友の乱

天慶二年（939）、平将門の乱が関東で起きたことに呼応するような形で、伊予に赴任していた藤原純友が反乱を起こし、海賊の首領として瀬戸内海域を荒し回った。翌年には周防国鑄銭司が賊のために焼かれてしまい、鑄造事業が中止となり、鉱山経営も廃止に追い込まれたそうです。